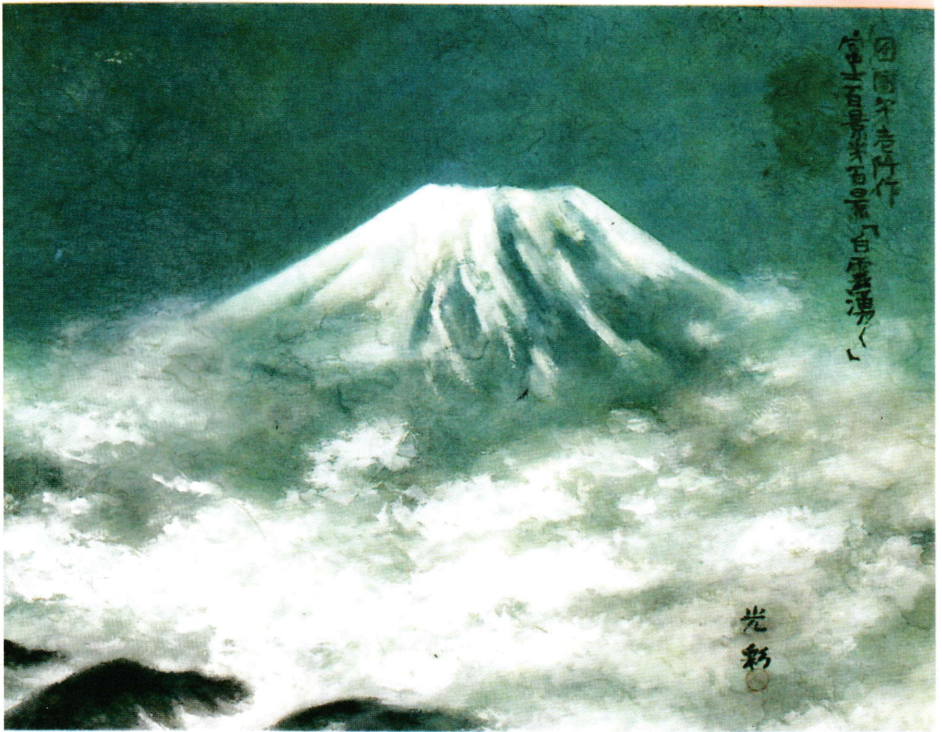


ソウ ソウ



さわさわ

12号

重信房子さんを支える会 (関西)

上告棄却の判決を受けました。

重信房子

7月16日の昼食時、15日付けの最高裁判所の決定の書面を受け取りました。

「主文 本件上告を棄却する。本審における未決拘留日数中810日を本刑に算入する」というものです。他に5行で刑事訴訟法405条の上告理由に当たらないと記した一片の決定です。逮捕以来10年近くを注いで政治裁判で不当に有罪がつくられていることを訴えましたが棄却という結果に終わりました。もちろん今、異議申し立てを提出しましたが、もうすぐそれも7月中に再却下されるでしょう。これで第一審判決の懲役20年が確定します。私にはこの最高裁決定は予想通りの時期に、予想通りの結果だったと、第一審の時のような怒りと驚きはありませんでした。

私の今回の裁判長は、外務省の親米官僚だった人です。2003年のアメリカのイラク侵略時、当時のレバノン大使の天木直人さんが日本政府に、アメリカのイラク戦争に反対するように具申しました。そのことで、天木さんに賊首を言い渡したのが、のちに最高裁の判事となった竹内行夫氏です。また、彼を支えた二番目の裁判官は、元大阪高検の三井環さんの本「公安との闘い」に記されている元検察庁の古田佑紀刑務局長です。古田氏は裏金隠蔽に「けものみち」と書かれているように、原田検事総長と一緒に後藤田官房長官に話しに行った人物です。あとの二人の裁判官は2010年1月に最高裁裁判官に任命されたばかりの方々です。

私たちが闘っていた70年代当時（私の起訴された事件も含めて）、直接対立していたのは外務省、検察庁、アメリカです。この当時の当事者とも言える出身者たちが、既に検察の一方的な物語によって有罪とされた判決を覆すことはあり得ないと思っていました。「予想通り」というのはそういう内容についてです。

ちょうど私の公判の始まったあとに起こった「9・11事件」を最大利用して無期重刑を検察側は求めていました。「日本赤軍は日本における国際テロリズムの原点であり、その代名詞である。重信はハーグ事件の首謀者であるばかりではなく、テロリスト集団である日本赤軍の責任者であり、わ

が国は国際テロリズムに断固たる措置をとることが国際社会に対する責任であり、重信を厳しく処断するべきだ」と繰り返して述べていました。かつて「超法規的措置」を強いた日本赤軍に対する政治的裁判です。事件そのものは「やったはずだ」という推測の主張ばかりでした。

第一審はやってもいないことをつくりあげていった国家権力に怒りが湧いたし、悔しい思いで、反論の最終意見陳述をしたものです。あの時の悔しい怒りは「判決は終わりにあらず始まりとまつろわぬ意思ふつつと湧く」として一首零れました。この2006年2月23日に公判を傍聴していた中に森本さんと田川さんがいました。そして、判決後、記者会見して弁護士と共に、母親の無罪を訴えるメイに連帯の思いを込めて、京都で「重信メイさんの話を聞く会」を開いてくれたのです。2006年6月、友人たちが集まって、メイの話を聞き、パレスチナの政情に耳を傾けてくれました。この時の友人たちが核になって、2007年6月、京大西部講堂でパンタさんの「オリオン頌歌」などの演奏とともに、「重信房子さんを支える会（関西）」の発足を企画してくれました。200人の人があつまったそうです。そしてこれを機会に「さわさわ」が発行されるようになりました。

こうした友情はどれだけ私を励まし、勇気づけてくれたことでしょうか。そして、「さわさわ」の発行を通して次々と昔の仲間と出会いました。不思議なほど嬉しいことでした。しかも、何十年の断続を飛び越えて、旧友と昔のままの関係で交流、再会の機会を持てたことは、幸せなことでした。

また、新しい友情も「さわさわ」の中から生まれました。2000年11月逮捕以来、私の帰国逮捕によって多くの方々に被害を与え、申し訳ない思いで一杯でした。そうした中であって、弁護士ら、みんなの協力でメイが国籍を取って帰国することができたこと、そしてまた、「さわさわ」や「オリーブの樹」の友人たちに励ましを受けながら、公判をずっと楽しい交流の場として闘ってこれたのは、本当にみんなの心と繋がって生きてきたからだ実感しています。逆境とは言え、幸せな10年でした。まずそのことに感謝します。

けれども、新しい、「受刑者」の環境はこうして文通することも厳しく制

約しています。今はまだ、どこに移り、どんな環境、条件で受刑処遇が科されるのかわかりません。それでもこれまでの「さわさわ」をはじめとするみなさんと共感、共振してきた友情と志を抱いて、どんな環境にあってもさわさわ！（一緒に！）と進んでいきます。友情のお便りも待っています。

「さわさわ」の誌面に私の文がないとしてもそこには、行間に共感、共振している私もある、けれども書けないのだなと思ってください。私もまた、最善を尽して「さわさわ」に書くようにします。そして絆を握りしめて進みます。刑の満期は正確にはわかりませんが、リッダ闘争50周年の前後だろうと思います。「支える会（関西）」が、リッダ闘争戦士たちの歌を演奏しながら、西部講堂の屋根のオリオンの星を見上げながら発足したように、50周年にはあのオリオンの三ツ星の輝く西部講堂で皆さんと共に踊り、歌い、乾杯したいと思っています。

いつも共に、これからも共に！多くの励まし、支え、友情、ありがとうございます。皆さんも健康でいてください。共に乾杯しなくちゃ！

7月26日 記

はたちの時代（4）

重信房子

明治大学学費値上げ反対闘争—66年～67年—

1. 当時の環境

1965年秋から、66年秋は、私はまだ大学生活やその社会の内容をよく知らないままにまさに希望にみちた学生として20歳を謳歌していた時代です。早大雄弁会にも友人がいたし、ネール記念杯の雄弁大会も、早大の大隈講堂だったし、65年は早大に行くことが何度もありました。早稲田大学は学ぶものに門戸開放で、門がない大学なんだよ、と、友人が案内してくれた校内をきょろきょろ見まわすと、門はないけど、明大の数倍の数の大きな立看があちこちにあります。アジテーションやデモありの、騒然とした大学だという印象をうけました。当時、65年早大は、学費値上げ反

対闘争のまっさい中だったのです。「あれが大口議長だよ」と友人に言われてみると、体育会系のような若者が、ハンドマイクでアジっていました。まわりには立っている人も座って聞いている人も又、そのまわりを横切る人もいて、パラパラでのびやかな雰囲気だったように記憶しています。でも、後で聞くと、早大は、いろいろの党派のゲバルトが激しくて、のちに大口議長も暴力の犠牲者の一人となったようです。学費値上げ反対闘争は、その前に慶応大学でも闘争が始まっていたようでしたが、私が知っているのは、早大闘争からです。学費値上げ反対闘争は、社会的・客観的な様々な要素をもって慶応・早稲田から私学の学費値上げとして全国化していきました。当時の経済成長路線は、アメリカ流の大量生産・大量消費へと向かう上昇過程にありました。生産手段の更新をもって本格的に産業構造の「革新」を始めていました。そして、それに見合った「期待される人間像」や産業に、ふさわしい教育再編・管理統制を求めた文部省の指示がありました。大学は、戦後の新しい教育を求めて出発しながら私学は慢性的赤字だったようです。「社会的要請にみあった大学」という名で、国の助成金も「ひもつき」で大学の管理が強化され「産学共同路線」に向かって進みました。「真理の探求」は、二の次の、大量生産大学化と、学費値上げによって経営を立て直そうとする動きと重なります。学生運動においては「安保が潰れるか、ブントが潰れるか」と、60年安保闘争を闘ったブントは“四分五裂”して一旦、停滞期に入っていた時期を脱して、新しい流れが形成されていきました。大管法に反対する動き、ベトナム戦争に反対する国際的な動き、65年日韓条約に反対し、アジア再侵略を懸念し、日本の戦争責任を問う動きなどです。こうした新しい流れに乗って、これまで活動してきた反日共系の人びとが、都学連から更に全学連結成へと、学生運動を再統一していく動きの中に、明治の学費闘争がありました。全学連再建と、明治の学費闘争は不可分な関係にあったのだと、歴史的に、とらえ返すことが出来ます。この時再建された全学連を中心として、今後の進むべき道を明大学費闘争の中で問われたと言っても過言ではありません。「革命を目指す」党派と「自治を基礎とした学生運動」が相対的別個の運動方向を持ち

うるか否かが明大闘争の中で問われていたのです。言い換えれば党派政治に以降の学生運動が収斂されてしまうか否かの分かれ目に明大学費闘争があったと言っても過言ではありません。

当時の明治大学は、一部（昼間部）2万5000人、二部（夜間部）1万人の計3万5000人の学生が学んでいました。神田駿河台、生田、和泉と三つの地域に校舎が離れていましたが、夜間部は神田駿河台にありました。私は、一年生の秋から、二部サークル連合の「研究部連合会」（略称 研連）の執行部にいました。この研連のサークルが幾つあったか、もう忘れましたが、20サークル以上あったと思います。夜間、働きながら集い、研究したり趣味を深めたりする「研究部」（サークル）です。その連合体の自治会執行部にいました。この研連は夜間大学の各学部自治会同様の自治会の位置にあり、その上に全学自治会として、学苑会中央執行委員会がありました。1年に1～2回、6月と11月頃、学生大会をひらき、学苑会中執が、統括と今後の活動、予算、人事案を示し、その信任を問います。各学部と研連の大会はそれぞれが別個に行なっています。全学大会の代議員は各クラス代議員が一票の権利を持つように、サークルも一票の権利をもっています。当時は、文学部と政経学部の自治会執行部が反日共系で、研連、法学部、商学部自治会は日共系でした。全学を統括する学苑会も日共系だった為に、全学学生大会では、いつも、日共系が勝利しています。その為、政経学部と文学部は全学学生大会はボイコットしたりしていました。日共系はボイコットに対抗して「政経学部自治会民主化委員会」、「文学部自治会民主化委員会」をつくって、全学大会への参加をよびかけます。そんなことから、私の文学部史学科のクラスでは、65年のはじめての学生大会では、クラス決議で大会には参加せずにオブザーバーとして、様子をみると決めたはずだったのです。ところが、代議員が勝手に代議員席に座っていたように、日共系の「ずる」で、怒っていました。かなりズサンに大会がこれまでも運営されていたということが分ってきました。だから、私は真面目に活動して学生を味方につけ多数派工作をすれば日共に負けるはずはないと思っていました。これまでの雄弁会を通した地方の選挙運動などで、

そうした票読みや、事前工作の重要性を学んでいたせいもあります。当時、私に加わるまでの研連は、いわば日共系と目されていました。研連は日共系の学苑会中執を認め、党派的なことに興味もなく、そうした動きをしなかったからです。研連執行部は、各サークルの円滑な運営と助成金や学生会費の総額から、予算接渉を行なって、各サークルに配分すること、大学祭や各サークルの行事の支援などが主な活動です。もちろん二部の学生は、当時の政治状況から、みな政治意識はしっかり持っていますが、党派的なセクト主義的動向には興味を示さないというところでした。

私は一年生の学生大会の経験から、3年くらいかけて、きちんと真面目な自治会活動をすれば、学苑会執行部も反日共系が掌握することは、可能だろうと思いました。政経や文学部自治会では、そういうことを現実計画として考えたり行動したりする人が居ず、自分たちの自治会を民主化しようとして介入する日共との争いで精一杯でした。私は日共系のあきれた学生大会を現認して以降、研連から変革を求めれば必ずどの学部にも声を届けることができるので、やってみようと思ったわけです。大学の雄弁も一定やってわかったし、学生大会をひっくり返すことに熱中する正義もやりがいあると思いました。クラスの友人に話すと「君、オールスター戦の野球感覚みたいに言うねえ」と驚かれました。でも正義の実現の一つと真剣だったのです。それで、自分の所属する文学研究部に、私を研連執行部に派遣するよう推薦してほしい、と言いました。確か、まだ一年生かこれから二年生になるところで、誰もやりたがらない研連の執行部をやるという奇特な私は、数十人の部員から、不思議に見られたでしょう。ことに政治意識は十分にあっても文学的に作品に表現するサークルだったので、幹事長（研究部の長を当時、幹事長と呼んでいた）はびっくりしていました。数日後、幹事会で話して、本人が主体的にやりたいなら、部として推薦しようということになったと、推薦を決めてくれました。それで、研連大会を経て、65年11月（か66年初め）くらいに、初めは研連の執行部の副事務長に入ったわけです。その後すぐに事務長をやっていました。各サークルの意見や希望、トラブルを集約、対処する役割です。研連は、党派的な人びとの

自治会より健全で、まず、活動の領域が広くありました。教育研は教師になりたい人びとの研究機関のようだし、政治研は社会党系の研究者でマックス・ウェーバー、ルソーから基礎的な学習会をやっていました。又、近代経済研はケインズ政策を研究していました。社会科学研には日共系のマルクス主義者が多くいました。他に空手部やジャズ、軽音楽、演劇部、文学研、雄弁部、地理研、歴史研、哲学研、法学研など多岐にわたります。各研究部には、やる気のある自主的な人びとが集まっています。彼らは授業と勤労の合間の貴重な時間を注いで真剣に活動しています。各学部を越えてサークル活動に参加しています。その分、研連執行部の訴える企画や要請に、多くの人びとが参加します。当時の日共学苑会執行部ともとても友好的でした。それに研連に入ってわかったのですが、反日共系の人たちから「日共の牙城」とか「民青のいいなりの研連」と聞いていたのですが、そんなことはありませんでした。研連執行部も、社会科学研究部と民主主義科学研究部などが日共の牙城でしたが、それ以外はそうではなかったのです。反日共系の人びとのやりかたの稚拙さで、結局「敵」としてしまっただけでした。それに、研究部の中には、職場で社会党系や協会派系の組合運動をやっている人も多く、学苑会が「日共系執行部」だったので、別段かかわらなかつたという人もいました。掘り起こせば、いろんな人がいました。夜学研も夜間大学の向上を都レベル、全国レベルで、どう行なっていくかなど、研究している真面目な良識派の人びとが多くいました。

研連執行部に加わった新米の私は、夜学研や政治研、雄弁会やジャズ、軽音楽研などの仲間たちと、夜間大学での研究活動の条件の拡充（予算・場の確保・昼間部との調整）など楽しく尽力しました。丁度66年に出来たばかりの学生会館が開館しました。3階には学苑会（二部）学生会（一部）文化研究部連合（文連一部）研連の各執行部の部屋が使われ始めたばかりでした。学苑会は日共系、学生会も文連もブント系だったので、3階には日共系と同居です。そこで研連は文連と、連携しやすく大学祭（駿台祭）など66年の共同準備が盛大に行なわれました。というのは、66年は、明大が創立85周年（明治法律学校）の記念を大きく行なおうとしていた為で

す。加えてこの頃、66年に学費値上げの話が出てきました。当時、65年から学生部長の任にあられた宮崎先生の『雲乱れ飛ぶ』という本や「資料集」を参照しながら当時は知り得なかつた事情なども含めて現在から捉え返してみたいと思います。この『雲乱れ飛ぶ』という宮崎先生の本は2003年10月21日に発行されました。私家版限定200部です。実はこの本に先立って明大の当時の学生自治会（昼間部）の米田隆介、大内義男、斎藤克彦氏らが明大学費闘争の記録を残そうと、宮崎先生を含めて、その作業に入りました。そして2003年4月26日には、当時の明大記念館のあとに建てられたリパティータワーの演習室で、明大学費闘争のシンポジウムも開催されて、活発な討議が行なわれたそうです。その後、本へと執筆していく過程で、斎藤克彦氏らが宮崎先生との見解と相入れずに、又は原稿が集まらず、一冊の本とはならなかつたようです。そこで、宮崎先生は当時の学生部長としての立場から、「雲乱れ飛ぶ 明大学園紛争」という本を執筆「自家出版」され、米田隆介さんが『明治大学学費闘争資料集』としてまとめ、2冊のものとなりました。米田さんのものは当時の学生側の生の資料と当時の学費闘争に参加した人びとの経験談が載っています。私も獄中から参加して一文を寄せています。それらを参考にしながら当時を現時点で、俯瞰的にとらえながら明大学費闘争をふりかえってみます。

2. 66年 学費値上げの情報

当時の明大の理事会は、財政状況の悪化にもかかわらず長年対策をたてずにきました。学費値上げも、考えては実行せず、財政悪化は慢性化していたようです。明治大学理事長は弁護士で日本弁護士連合会会長、国際法律学連絡協会会長の長野国助、総長は武田孟、学長は小出康二で、比較的民主的考えの方でした。小出学長は、自ら60年安保に学生に国会へのデモを呼びかけて、大学正門をロックアウトし、紫紺の校旗を掲げたデモの先頭にたった人として、知られていました。

宮崎先生の著書によると、65年の教職員の新年会で、武田総長は学費値上げを考慮せざるをえない時機にきていると発言されたそうです。「1965年の5月24日に昭和41年からの値上げ方針を理事会で決定したが、早大

紛争におじけづいたのか、11月20日になって『値上げ断念』を表明したのだった。その為、昭和42年度は、どうしても、値上げせざるをえない状況に、大学側は追いつめられていたのであった」（「雲乱れ飛ぶ 明大学園紛争」宮崎繁樹 著）と記されています。65年に学生部長に就任した宮崎先生は、小出学長に、「授業料値上げ問題について」という文章を提出したと記しています。その文章で、早大の反対闘争を教訓として、対処を計る必要がある点をのべています。真の大学をめざす為には、現状より研究者の不足による学問の危機、負債にあえぐ財政の危機、政治的に中立たりえない大学の自治による危機、この3つの危機を解決する為には、一丸となるべきと宮崎新学生部長は訴えています。また、学費値上げの時をむかえる学生部長として、66年に「護民官として」と立場表明を述べています。「ローマにおいて政府から任命されつつも、民衆のために尽力した『護民官』のように学生部長は職制上大学の機関ではあるが、学生を真に守る『護民官』として行動しようと心に誓ったのだった」（同）と当時の心境をのべています。学生の側は、66年の4月以降、新年度からの学費値上げが噂されており、昼間部・夜間部学生会中執・学苑会中執とも、理事会に対して学費値上げをどう考えているのか？の打診を行なうようになりました。「6月17日に学苑会（夜間部学生自治会）から、18日に学生会（昼間部学生自治会）から、それぞれ、学費値上げ経理内容公開を求め大学理事会に『団交』の申入れがあった。同月24日に、大学側と学生側との第1回話し合いが持たれた。それはその10日ほど前、学外の『駿台荘』で理事会が開かれたらしいとの噂を学生側がキャッチしたからだった」（同）と、書かれています。66年当時の昼間部和泉校舎の学生会のビラには、以下のようにかかれています。「学費値上げ決定か。六・二二大衆団交を勝ちとろう。理事会は学生と話し合いを！ 全和泉の学友諸君！ 去る15日、理事会は一方的に学生の前に授業料値上げの決定を提出してきた。この授業料問題は、諸君が、充分承知のように、現在の日本の大学の最大の矛盾としてあり、その典型的なものとして、早大闘争があることは、理事会のみならず、学校関係者は、充分知っているはずである。そして、現在の明治大学におい

ては、その矛盾を解決しようとする姿勢すら学校側には、見えず、ただ単に、他大学より遅れて値上げするのだから云々という形で、この授業料値上げの本質を隠蔽し、現在の段階においても、完全に学生を無視している。（中略）我々は授業料値上げには、絶対反対であり、反対しなければならない。なぜなら、この学費値上げが、大学のあらゆる矛盾の集中的な表現であり、具体的には、マスプロ教育の、あるいは、産学協同路線の方向の追求の発端であることは、明確であり、我々学生を商品として、単なる物として、機械的人間として、位置づけようとするものなのである。学友諸君！ 真の大学とは何なのだろうか。それは、理事者達によって作られるものであろうか。もはや、我々自身の手でしか大学の矛盾は解決できない時期にきているのだ！ 学生会中執、法、商、政経、経営、文、各学部、学生会」（「明治大学学費闘争資料集」より）

こうしたビラが、和泉校舎でも、神田駿河台校舎でも撒かれ始めました。社会主義学生同盟明治大学支部が発行した「コミニズム」号外1966年6月23日号には「学費値上げは阻止せよ！ 阻止闘争の巨大な前進に向けて、歴史的な闘いの先頭に立とう！」と、訴えています。その中で早大闘争の総括的視点として（Ⅰ）早大闘争は、遂に大浜から、阿部に理事会指導部が交代したのを契機に終息過程に入り23日、全学授業再開によって、現象的には、事実上終わろうとしたと言える。（中略）闘争は、陣地戦と街頭戦との有機的結合も、決して民族主義的になしえないし、なしではならない。個別資本（ないしは理事会）と、国家権力の一体化に対抗する我々の力量は、総学生の、それでなければならない。早大闘争の敗北的事態にいたった原因の一つは、全学共の民族主義的対応によるところが極めて大きい。もちろんこの場合、学生の意識及び、情勢の推移を考慮しない訳にはいかないが、問題は、いかに総学生の運動へと、意識的に指導するかであり、かかる指導の放棄に結果する敗北の原因こそ徹底的に暴露されなければならないのだ。（Ⅱ）民青批判。早大闘争において「穏健派」と呼ばれブルジョアジーから事態収拾のもっとも頼りになる部隊として期待されたのが、民青である。かれらは個別資本（ないしは理事会）との闘いを回避し、反

米・諸要求貫徹に闘争を解消し、党派的闘争に学内闘争を従属化し、埋没させ、闘いを意識的に分断した。また彼らは、戦術的方針として、圧倒的大衆から、支援されたストライキに対して、学内の秩序を破壊すると称して公然と反対し、利敵行為を行なったのである（中略）明大においても、早大民青の、あの犯罪的な役割を、明大民青は、再び演じようとしているのだ。彼らを闘いの戦列から追放せよ！」（同資料）と主張しました。この時代は、全共闘運動のような、いわば少数派による占拠、自主管理、異議申し立ての時代ではありません。今から思うと、実に貴重なことなのですが、第一に「総学生」を対象として、徹底して民主主義のルールにのっとり学生自治会を運営していました。民主的な多数派工作がとても重要でした。その分、抗議にも秩序がありました。第二に、早大闘争の敗北をまのあたりにした時代にあったことです。右翼による暴力、民青によるストライキの解除、国家警察権力の当局と一体となった自治への介入などなど、「次は明治だ！」と、ひしひしとした思いがありました。第三に日共民青との闘いです。当時の学生運動は、共産党の分裂（58年の共産主義者同盟の分裂のみならず国際派との分裂に続いて、中国派とも当時日共はひきしめの党内闘争がはじまっていた）を反映していました。その分、路線的にも日共系と反日共系では鋭く対立していました。日共の反米闘争に収斂していくあり方に対して反日共系は反独占の日本資本主義との闘争を中心にとらえるべきという考えに基づいて、日共の要求闘争（国庫補助や諸要求）を闘争の回避と批判しました。又、国庫補助運動を教授会と共同して政府、文部省に行なうべき、という方針に対しても反対していました。反日共系の考え方はもっと根本的な、日本資本主義の帝国主義的再編にともなう学校教育行政そのものを問う中で、学費値上げ阻止闘争を位置づけて闘うべきだという違いがありました。当時昼間部（一部）は反日共系のブント・社学同が学生会中執を握っており、夜間部（二部）学苑会高橋中執は日共民青系の人びとが握っていました。その為、両者の足並はそろっていませんでした。夜間の政経学部執行部はML派や中核派系の人びとやノンポリ、文学部の方はML派系とノンポリの反日共、研連執行部は日共系

もノンポリなどもいました。研連は、他の法、商、学部同様、日共系学苑会を正規の中執と認めていました。

3. 66年「7・2協定」

学費闘争の話が、6月から始まりつつある中で、昼間部と夜間部の執行部の路線の対立も顕著になってきました。66年6月29日付の文学部学生委員総会の討論資料「レジュメ」には、次のように記されています。「学費値上げに何故反対するのか？・経営者の言う『私学の危機』とは何か？私学の会計は、御存知のように経常部と臨時部に分かれています。経常部（給料・研究費・図書費…等々）臨時部（建築費・借入金返済…等々）、いわば経常部は、我々学生・教職員に還元される部分であり、臨時部は、建築費など学園建設計画のための設備投資に使われる。現在「赤字」といわれるのは、この臨時部の予算であり、この設備投資は、我々学生・教授等、いや、大学教育を考慮に入れた計画ではなく、単に学生定員をふやす（もうける）ためであり、この設備投資で建てられた建物は、彼ら経営者の財産になるのだ。これで、生じた赤字を学生におおいかぶせるのが、理事会だ。・私学は、いかなる方向にあるのか。私たちが、この春以来闘った「大学設置基準」改悪、そして「教免法」改悪の闘いが、いかに学費値上げと関連しているのか。現時点において何をなすべきか。この間は、私たちは、理事会に団交を申し込んできたが、理事会の、『決定していない段階において、学生と話し合いの必要を認めない』という不誠実な態度によって、団交は拒否されつづけている。私達は、このような理事会の態度を弾劾すべく、6月30日の、常勤理事会、7月4日のオール理事会で、学費値上げ決定阻止の闘いを組むことが、今、必要だと考える。一方、クラスにおいて、学費値上反対のクラス討論をより徹底させよう。」（同資料）こうした中で、学生と、学長の間で、夏休み前に、確約書がかかわされました。これは「7・2協定」と呼ばれ、後のちまで、明大学費闘争での出発点となりました。「確約書 本年6月24日と、7月2日の2回にわたり大学当局と学生会は、昭和42年度の学費問題について話合ったが、本7月2日に至りこの問題について次の確約をみた。 確約一昭和41年9月以降学生当局と、学生会の

両者は、昭和42年度の学費問題について話合う。尚、この話合いの前提として、昭和42年度の学費値上げについては、値上げするという基本方針決定以前に話合い、事情によっては、昭和42年度の学費は、値上げされない場合もある。昭和41年7月2日（法人理事会を代表として 明治大学学長小出康二、 明治大学学生会中央執行委員会 委員長中沢満正）」ところが、7月7日付の明治大学新聞では、法人理事会は、6月13日に、駿台荘で、「かねて法人企画室でまとめていた資料をもとに学費改訂の具体的対策に着手。翌14日第一会議室で、教員出身常勤理事を中心に、学内、特に学生に大きな影響を持つ教員対策を協議、翌15日、学部長会議に全役員が出席して、学費改訂を伏線として、法人の経営・財政実情の資料を配布した」という記事が掲載されました。このことは、学生に対して確約した内容と違っており、大学当局が、二枚舌をつかっていることを暴露しました、学生側は抗議し不信をもちました。7月24日、理事会は教職員に「本学財政の現状について」という小冊子を配布したのだそうです。宮崎学生部長は当時を次のように述べています。「その内容によると、現在明治大学の経常部予算収支は、赤字である。昭和41年度授業料収入は約15億9200万円で、収入総額の62.4%をしめ、その他の入学金2億8500万円、試験料3億1800万円、その他の収入、1億7000万円を加えても23億6500万円にしかならず、25億5000万円にのぼる必要経費をまかなうことは出来ない。支出の76.4%は、人件費、19億6500万円、研究・教育経費は11.6%の2億9500万円、その他一般経費は、11.5%の2億9300万円というのであった。明言はしていないものの、常識的には、学費値上げが必要であることを窺わせた。建築等にかかわる臨時部予算においても、借入金が入収入の40.6%にあたる4億2800万円、学費が19%の2億という危機的状況であった。学生が負担する授業料、入学金、施設費の総額を昭和41年度の他大学と比較してみると、文科系について、慶応義塾大学49万円、早稲田大学42万円、立教大学45万円、同志社大学39万円に対して、明治大学は27万円であった。理科系についても慶応義塾大学69万5千円、早稲田大学68万6千円から71万円、立教大学61万円から67万円、同志社大学55万円に対して

明治大学は40万4千円から41万2千円であった。（『雲乱れ飛ぶ』より）

私の二十歳代（2）

米澤鐵志

前回書き落としたが1954年の成人式で忘れられぬ思い出がある。当時広島ではその年度に成人になる人を対象に「成人式」を行っていたが、対象者が多いため高等学校の学区地区ごとに市の主催で行われていた。当日会場に早めに出かけると、150人ぐらいの青年男女が集まっていた。そこに高校の同級生で広島市役所に勤めていたK君がいきなり、祝辞に対する答辞ができる人が見当たらず、いろんな人と折衝したが断られて困っているのをひとつお願いしたいといってきた。私はシメタと思ったが不承不承のていで引き受けた。

式が進み答辞米澤鐵志と呼ばれたときには、高校を退学になった米澤がまさかと、周りの人たちはビックリしたが、私は太平洋戦争の苦しみと特に原爆の悲惨さを強調し、朝鮮戦争は休戦協定で終わったが、まだベトナムでは仏印戦争というかたちで戦争が続いている。私たちは10年前のあの悲惨な体験を思い出し、また日本の平和憲法を思っ地球から原爆と戦争を無くすための世界を作る努力が必要でそれを成人の誓いとし、と結んで拍手を受けたが、式のあとの懇談会で原稿をみせてくれとゆう人がいて「あれは急に頼まれたので即席だ」と話すと当時は人前で話をするのが少なかったせいもあるが、話を聞いた多くの人たちは「米澤は天才」と誉めそやしてくれた。昔の天才が今では人前で話すのが苦手になった、ただの人になった見本である。

私は共産党を除名になると同時に父からの送金が止まり、たちまち生活に支障をきたした。当時同時期に共産党を除名になり、できたばかりの社会主義革新運動（社革）の府委員長のY氏に相談したところ当時京都南病院の副事務長で伏見診療所の事務長をしていたT氏を紹介してくれた。

京都南病院は1950年代のはじめごろ、共産党系民医連のもと大山郁夫氏が「平和病院」と命名したが、共産党6全協のころ南病院になり、民医連の中では北の堀川病院と並んで全国民医連の中でも中枢の病院で、医師にはトロッキストといわれた大屋史郎氏をはじめ元京大医学部細胞のメ

ンバーが3, 4名勤務していたが、理事会や院内の運営は共産党細胞が大きな力を持っていた。

私が除名になった共産党8回大会の後、T氏は離党届を出しており、南病院の理事であり伏見診療所の創立者で染色工芸家では無形文化財の候補にも挙がった人だった清水氏に頼み伏見診療所で採用という非常手段で同診療所に勤務することになった。

当時南病院細胞キャップで庶務、会計を握っていたAは私の採用が細胞会議の決定を経ていないと抵抗し、事務長の査問まで及んだが、清水理事の意向もあるということで3ヵ月後に正式に職員になった。

大屋氏はもともと共産党を除名になっていたが、なにせ病院自体が大屋氏の実兄から借りていたのを彼を追い出すことはできなかった。しかし8回大会で綱領に賛成できなかった5人の医師や事務長、副事務長を始め10名近くの党員が離党したため、細胞の力は弱体化したがそれでも理事会は共産党の府、市議員や民商、全日自労の代表で多数を占めていた。

ちょうどその年の越年闘争で(民医連)は傘下5病院10数診療所で統一団交を行っていたが、団交中の経理公開要求で、中心的理事(勿論共産党員)が組合側のメンバーに大屋氏がいることをさして「トロッキスト」に人民の財産である民医連の経理は見せられない。と発言したことが大問題になり、各院所に共産党8回大会を契機に離党した人やもともと共産党支配に反感を持っていた人もいた労組側は労基法違反の団交拒否で大騒ぎになって、党の対応のまずさもあり、全国的にも代々木病院、上二病院につくような堀川病院が民医連を脱退するとゆう意外な事態に発展した。

堀川病院の院長は、はだしの医者として有名な早川一光(当時共産党市会議員)や米田事務長(全学連5代目委員長)や組合代表には同じく8回大会で離党したO(元兵庫県学連委員長)などもいて、いち早く代々木の支配から離脱した。

一方の南病院も私の採用問題も含めて院内はゆれ、労組は共産党員以外ほとんどが病院の行方に疑問を持ち出した。私は入社三月後には組合の役員になり、他方他の事件(これもS診療所で所長をしていたM医師を党の

方針に反するとして、罷免、除名した)で伏見診療所の所長になっていたが、職員の信頼の厚いこの人を顧問にして水曜会とゆう勉強会を発足させ、若手のX線技師、検査技師、看護婦、事務員など10名近い人と政治情勢や院内問題に取り組んでいった。

日韓問題やベトナム問題もあり、組合にも持ち込んで集会やベ平連系デモに参加して時には逮捕者を出したりして問題意識を高め、私の大学時代の同志も採用させ院内フラクションを形成していった。

私は組合活動の二年目には副委員長になり、委員長の大屋史郎氏と執行部を組んだが大屋氏はトロッキストの草分けとして有名であったが、大変温厚で常識的な人で、革命家は十人味方をつけてもそれ以上の敵を作っては失敗だといっていた。

私は彼と平和共存、暴力革命など意見を異にし時々論争したが、人に押し付けることがなく、オルグには不向きな学者肌だった。それでも組合委員長としてみんなをまとめていた。

当時南病院は老朽化しており、京都南の拠点病院として「新病院」の建設が日程に上がっており2百床を超える規模の病院を目指してスタッフも大きくなっていった。

しかし庶務、経理を細胞キャップAに握られた状態は院内がギクシャクしており、院内に影響力を強めていたわれわれ「水曜会」はまず庶務に私の同志Tを送り込んだ。

同志社出身で堀川病院からきたH君も仲間になり、新たに新病院体制を強めるという名目で庶務、経理を一括して総務部にしその部長に米澤を上げることになった。

院内の我々の影響力を見ていた管理委員会はこれを承認し全職員総会で機構改革と米澤総務部長を発表した。

このころ「トンキン湾事件」(後にアメリカの謀略と判明)を理由にアメリカの北爆が始まり国際的批判が起きたが私は毎日「アメリカはベトナムから手を引け」のゼッケンをつけて出勤し、職場でもつけ続けていた。院内では総務部長たるものが仕事でもゼッケンをつけているのはいかなるも

のかと批判があったが、私は意に介さず続けた。

新病院は理事会でも共産党系理事の疑義で難航したが民商系の理事など院外理事の三名が新病院の建設に賛成し、資金面も住宅公団に5階以上を貸すことにし地下から4回までは病院で10階までが公団住宅とゆうころで建設が始まった。

当時京都南部では10階建ての高層住宅はなく、落成後は新幹線からも突出してみえた。

院内で行き場のなくなった共産党細胞は、新病院の基礎工事が地階までできたごろに、ついに3名の理事の辞任と同時に日本共産党南病院細胞の「資本主義の手先になった南病院」というビラを院内の役職、組合役員を除いた職員に郵送した。

その翌日には今度は共産党南地区委員会の名で下京、南区の全域に「人民の病院を資本に売り渡した」「大商社江商から巨額の借金」「フルシチョフ修正主義の管理委員会」などの外れなビラ「タプロイド新聞」を数万枚配布した。その中には秘密にあたる資金繰りなども含まれていた。

病院は管理委員会（Aをふくめ、西京診療所事務長、看護部長、医療事務部長など共産党員がいた）を開きAの背信行為を批判したが自分は正しく、正当な行為だと言い張ったので、病院としては自宅待機の出勤停止を命じた。

しかし彼はそれに従わず、翌日から待合室で患者さんに「皆さんの病院が金持ちしかかかれない病院になる」などのデマ宣伝を始めたので、私は自宅待機を命じた管理委員会の決定を守れ、君は途中まで新病院建設の推進者ではなかったかと、糾すと「お前ら反党分子に病院をのっとられた」などわめき、多くの職員や患者さんにさえぎられて退出せざるを得なくなった。100人以上いた労組も共産党員数名を除いた圧倒的多数で病院の姿勢を支持しAの懲戒解雇要請を決議した。

私は各職場を回り新病院計画の内容を説明し、地域住民の病院としての歩み、職員を中心にした民主的経営を目指すよい医療の病院づくりこそ、我々の願いで、共産党のいう地域民衆から離れた病院には決してならないとオ

ルグし職員の理解を得ていった。

管理委員会はAの懲戒解雇を決め理事会も追認したが、Aは不当解雇だとして裁判に持ち込んだ、病院は（特に医局）彼の将来も考えて、退職金を払う解雇で示談を提案（これには院内の一般職員の中に強い反対があった）したが応ずることなく2年近くの裁判になり、私は当事者代理として、裁判を傍聴し病院側証人や当事者としても証言し、裁判を勝利に導いた。この裁判の判決は「共産党員の経理部長を懲戒解雇にした件」として「ジュリスト」にも掲載された。

共産党8回大会後、全国の民医連のなかで事務長や医者が反乱した例は多数あったが

共産党の支配下を完全に脱した例は稀有であった。

新病院が落成した1964年の成人式に、私は新成人になった職員に総務部長として、記念品を渡したが30歳であった。

あれから46年、その後私は南病院から高雄病院へ出向し、後南病院と縁が切れたが新病院建設時の多くの職員たちが離れ、京都南病院は今では高度医療を目指し、職員を軽視し、管理者の意に沿わぬ職員を退職強制するなど、かつて長野の諏訪病院などと全国地域医療推進の中心的病院が、そこからも離れ昔共産党から指摘された金持ちのための病院とまでは行っていないが、多くのOBたちを失望させているのが残念である。

【追記】

重信さんの上告棄却、判決確定知りました。大変残念なことですが、今の日本の司法では期待すべきもないと、覚悟していました。07年に私の被爆体験を読んでいただき感想を頂いてから、3年間文通交流をさせていただき、また今年の1月には森本さんとパンタさんのご協力で房子さんとお会いでき短い時間でしたが、彼女から強いオーラをいただき「運動」をさらに強化したいと発念しました。下獄されれば今までと違って外部との連絡は困難になると思いますが、一方通行でも重信さんとの交流を深めたいと思っています。

重大な病気を抱えながらの獄中生活、強い意思で勝ち抜いて欲しいと願

っています。

8-6 ヒロシマ—高史明さんを迎えて—

森本忠紀

澄み渡る八月六日広島に空に充ち満つ平和の祈り

去年、このように詠んでからちょうど一年経った八月六日、今年も広島の平和祭に参加することができました。「ヒロシマ平和の夕べ」の集会は午後4時開場予定ですが、お昼よりずっと前に広島駅に着き、その足で、原爆ドームに向かいました。去年同様よく晴れ渡った空の下、原爆ドーム前には、家族連れ、グループ旅行の集団、平和運動の団体、外国からのお客さん…、お年寄りから、若い人、子供たちと、ありとあらゆる人々が群がり、行き交っていました。早速、三線を取り出しぼくは、原爆ドームを背にして、「ちちをかえせ、ははをかえせ」と歌い出しました。歌いながら、ああ、この歌はまず原爆ドームに聞いてほしかったのだとぼくは思いました。

峠三吉との出会いは去年のことです。去年広島へ来た時、ヒロシマを伝える

歌を歌いたいと思ったぼくの脳裏に、峠三吉の「にんげんをかえせ」の詩が強いインパクトでよみがえりました。八重山民謡にぼくの大好きな「とうばら一ま」という名曲があります。試しにこのメロディーで歌ってみると、奇跡のようにピッタリ合って、ぼくは心の中で飛び上がって喜びました。そして、去年9月、ぼくの地元大和高田に米澤鐵志さんをお招きして、被爆体験の「お話を聞く会」を催したとき、お



話に先立って初めてみなさんに、この「にんげんをかえせ」を聞いていただいたのでした。それから一年、こうして原爆ドームの前に歌っていると、去年のヒロシマ峠三吉「にんげんをかえせ」との出会いから、ぼくにとって、今やヒロシマは切っても切れない結びつきが生まれたことを実感いたします。

ドーム前供花の替わりと三線を奏でて捧ぐ「にんげんをかえせ」

その間には今年の春の「ピースウォーク from 沖縄」の大和高田受入れに端を発して、奈良、京都、草津までも一緒に行動し、「にんげんをかえせ」を歌わせていただきました。国連NPT（核不拡散会議）に日本から民間平和使節が大勢行かれることを知ったのは、そのピースウォークの最中のことでした。急遽仲間に入れてもらって、4月の終わりにニューヨークへ飛び、一週間滞在の間に、国連前「平和広場」のイベントで「にんげんをかえせ」を歌う機会に恵まれました。それもこれも、すべて、去年この「平和の夕べ」の集会に参加したことから始まっております。それを思うと、この集会が毎年一度催されることの意味はとても大きいと思います。

そこへ今年高史明さんがメインの語り手として参加してくださる、個人的な関心ももちろんありますが、それ以上に高史明さんを招くというこの集会が孕んでいる可能性に何か期待するものをぼくは感じていました。話を聞く前にまず圧倒されたのは、会場入り口の販売で売られていた、高さんの本が広辞苑のように分厚いことです。ページ数九百ページ以上とくれば、これはもうそれだけでユーモアでもあるなあと感じ入りました。隣に並んで、40ページの「さわさわ」を売るぼくは、誘いこまれるようにこの本、『月愛三昧（がつあいざんまい）』を買いました。いち早く知花昌一さんが買っておられたので、今度会ったとき感想を聞かせてもらうのが楽しみです。

さて『月愛三昧』はひとたびページを開けばたちまちその虜になること請け合いです。一つ読めばまた一つと、次々に興味尽きない課題が連なって提出され、本を手放すことができなくなります。それはもう推理小説以上です。日本の歴史の各時代を通しての『古事記』の捉え方がダイナミックで縦横無尽、興奮が高まるばかりです。本居宣長に深く共感する小林秀雄を挙げ、近代にまで本居宣長の思想が生きているのは何を意味するのかと探索の目を向けられれば、これはもう本から目を離せなくなるではありませんか。書評云々などもとより及びませんが、また全部読破したわけではありませんが、聞いてほしくてうずうずしていることがらを吐露いたします。まことに理路不整然たるころはお許しいただきたいと思います。

まず驚いたのは石川啄木の話です。「東海の島の磯の白砂にわれ泣きぬれ

て蟹とたはむる」という有名な歌がありますが、この歌の「東海」とは高さんに言わせると日本海のことを指すということです。え？とびっくりしますが、朝鮮から見れば「東海」とは日本海のこと、朝鮮の人にとっては、「東海」と言えば日本海のことというのは明らかだと言われます。ということは、啄木がわざわざ、歌の冒頭に「東海」を持ってきたのは、朝鮮を強く意識していたということです。朝鮮が日本の植民地化され、日本に併合されたのは1910年（明治43年）、そしてこの歌が発表されたのも1910年でした。「大逆事件」により幸徳秋水らが逮捕されたのがこの年です。明治日本が外に向かつては、その侵略性を露にし、内に向かつては強権を押しつけ、国民にものを言えなくしていった、その年にこの歌が発表されています。この、1910年とは「石川啄木にとって、ただ泣きぬれ、蟹と戯れるほかない時代だったのです」と高さんは言われます。そんな孤独の中で啄木は日本が破滅するとの予感に恐れ慄いていた、高さんは啄木にそう想像を巡らされます。第二次世界大戦の、日本の内と外での夥しい犠牲は破滅としか言いようがなく、そんな恐ろしい未来を予感すれば、啄木の孤独はどれほど深いものだったことでしょうか。「東海の…」のこの歌をそのように読み解かれて、目から鱗の気がします。

ぼくも沖縄の基地問題や核の廃絶より自分の生活が大事と固く信じるみなさんに囲まれて大和高田で暮らしていて、日々孤独を感じていますが、とりわけ孤独を強く感じるのは高齢者学級に行く時です。ぼくは市が主催する高齢者学級に今年度から通うようになりました。毎月一回、公民館に大勢高齢者が集まって来られます。定員80名の室に毎回140名ほども集まって来られて盛況ぶりにびっくりしました。それとともに学級の中身があまりにも食い違っているのに万事オーケーで進行していることに啞然としました。「認知症にならないようにするにはどうことに注意すればよいか」、「家族関係をうまく保つ法」、「楽しく生きるための健康法」などをテーマに、その都度、お医者さんや、お寺さんが講師としてお話しくださる内容で、一年間のカリキュラムが決まっています、そのスケジュールを滞りなくすませることが高齢者学級のすべてです。学級生はただお話を聞いて帰るだけ。運営委員や学級長まで決まっていますが、ただ、教室運営のお手伝いをするだけ、極めて形式的で。学級生はお

互いを紹介しあい、交わる機会もありません。これをお仕着せと言わずして何と言うべきでしょう。腹が減ったとやってきて本当に求めているものと違うものを与えられて、おいしい、おいしいと喜んで帰っていく、例えて言えばぼくにはそんな風にしか見えません。誰に訴えようにも耳貸す人はいません。

ですが、あんなに大勢の年寄りがいつせいに集まって来る、その迫力から求めておられるものの痛切さを感じずにはおれません。ぼくもこの年になったからわかるのですが、「死ぬ」というのは大きな仕事だと思います。特に自分の親や後期高齢者と呼ばれる先輩たちの老後のあり様をみれば、死ぬときが来たら死ぬとか、考えても仕方ないですませておれない、誰にとっても重い問題に違いありません。解けぬ課題を胸の内に抱えて誰もが学級へとやってこられるのでしょうか。それでいて、話題をどう切り出してよいかわからない、最高に深くてまたデリケートな問題です。死んでからどこへ行くと問われたら今の年寄りはどう答えるのでしょうか。ぼくが子供のころは年寄りはよく地獄や極楽の話をしていました。遠くを見つめるような眼差しに、年寄りとはきっと死んでからどこへ行くか知っている人たちなのだと思います。今の年寄りは昔と違って地獄も極楽も信じてません。その分死がわからなくなった、死がわからない分生がわからないのではないのでしょうか。講師のお話は高齢者たちの、そんな胸深くたたまれた思いに応えようとするものでしょうか。みなさんお話がとても上手で、終ると聴衆は感謝の拍手で送ります。「違う」という思いがぼくの中で最高潮に達するのはその時です。

公民館まで足を運ぶことができるということは、高齢者といってもとても元気です。そしてたいてい第一線を退いた方たちなので時間的、精神的に余裕があります。さらに要介護状態になるまでにしばし猶予があります。高齢者見習いともいうような集まりの一員として、一緒に生を生きてみたい、そこから見えてくるものを一緒に獲得できればと、それがぼくが高齢者学級に参加しようと思った動機です。以前と違って人生の終着点がそれほど遠方のことではなく、それぞれに、ピリオドが視界に入ってきています。その分、一瞬、一瞬を大切に生きることができるのでないかと期待します。そこに、死というものがよくわからない時代、したがって生がわからない時代に人間がどう生きていく

かということを知ることができる可能性があるのではないか。講師はお医者さん、お寺さん、教育長などで、みな職業柄日常的に年寄りに親しく接し、直に話を聞いておられます。そのような触れ合いの経験から、感じたり考えたりしていることをわかりやすくお話されます。個性とユーモアがあり、お話に豊かな人生経験がかもし出す味があります。問題はそこなのですが、どの講師もご自分がわかる範囲で話をされます。あらかじめ答えることができる範囲に問題を設定されます。それでは自分が出した問題を自分が解いてるに過ぎません。しかし、高齢者学級にいつせいに押し寄せる年寄りが求めているものとは、はたして、講師先生が「これからの年寄りはどう生きればいいですよ」とたったひとつの解答を与えることができる類いのものなののでしょうか。年寄りに「こう生きなさい」と教えることは、そのまま、「こう死になさい」と教えていることに他なりません。今の時代、誰か死に方を教えることができる人があるのでしょうか。それよりも、答えのわからない問い、答えのない問いのまえに立ち止まらなくては。高齢者学級とは答えをもらって帰る場ではなく、高齢者自らが問いを発する場なのではないかとぼくは考えています。今は逆に、「どう生きていけばよいのか」という問いが生まれる可能性の芽を摘んでしまっています。それは講師の責任ではなく、学級生全員が同じ方向を向き、一人の講師のお話を聞いて、話が終れば学級が終るといような、学級のあり方に問題があります。せっかくの多様な人々が一括りに束ねられ、お互いに交わり、繋がることのできないような場へ来て年寄りは何ができるのでしょうか。それで本当におもしろいのでしょうか。それよりも、これだけいろいろな方が大勢集まっておられるのに、なぜお互いがお互いを見ることから始まらないのでしょうか。お互いを見れば自然と笑みが生まれます。それはもう親しい交わりの始まりであります。そこから、同じ土地に生きる、同じ年代の者同士の絆が生まれることでありましょう。そうして無限の可能性広がります。講師先生のお話なんていらぬ。それこそが学級という名にふさわしい人の集まりのあり方ではないのでしょうか。ぼくは高齢者学級がこんな風になることを望んでいます。しかし、現実はずいぶん違います。変わらないことが学級運営の基本です。ぼくは変革を求めて三度問題提起しましたが、三度とも取り上げてはもらえませんでした。ぼ

くのいうことがよくわからないという表情をされたのはさびしかったですが、今思えば、バラバラにして束ねていこうという学級運営の方針と、ぼくが言うことは相容れないのだということがよくわかります。翻って、年寄りの方も、行政に頼って老後の安心を得ようとすれば、学級のあり方に疑問なく、これを受け入れるのも無理からぬことで、行政側と高齢者側の利害が一致し、高齢者学級めでたし、めでたしとなってぼくの孤独は出口が見つからぬままとなってしまいます。それはそのまま大和高田でのぼくの孤独を意味し、おもしろくないからと、高齢者学級をやめても、大和高田でのぼくの孤独は変わることはありません。啄木の孤独を言われてぼくの孤独を引き合いに出すこと自体不遜なことと恐縮いたしますが、今年の「ヒロシマ平和の夕べ」に高さんがきてくださったことの意義はいっぱいありますが、ぼくにとってまずその第一は、啄木の孤独を時代の深い闇とともにくっきりと描き出し、啄木の叫びが聞こえるごとくに印象づけてくださったことです。

もう一人の人、日本を代表する俳人正岡子規像の鮮明でダイナミックなこと。「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」この有名な俳句に正面から向き合い、高さんは、「柿と人と寺。見事な三位一体です。この境地こそは、まさに人間の安心の極みだともいえます。」と評されます。そうか、この句が日本で長年に渡って愛されてきたのはこの句にある安心の境地が愛されるわけかと、これも目から鱗です。日本で俳句という文芸がこんなに盛んなのも同じ理由によるものと考えられます。そして、子規の俳句の世界が明治日本との一体化をその内実としていたと指摘されると、それは今日、日本全国津々浦々、大勢の人が盛んに取り組み励んでいる俳句という文芸世界にそのままあてはまることと直感いたします。現在日本の国家という体制と一体となって俳句があると。この、明治日本との一体化の感覚のどこが問題かといえば、それは他者の喪失だと高さんは言われます。この「柿食へば…」の句が読まれた年、朝鮮で王妃・閔妃が日本守備隊によって殺害されるという大事件が起きているにもかかわらず、子規の句には何の騷りも見られないことに高さんは他者の喪失を見られます。日本でこれだけ大勢の人が俳句に打ち込むのも、そこに死んで後どこへ行くかを知らない現代日本人がせめて安心の境地を得たいとの思いが働いているとす

るならば、無理からぬことと、ぼくは思いますが、子規の安らぎは自分一人の安らぎであり、他者との深い繋がりがなかったと指摘されれば、いや私は子規とは違うと言える人はまずいないのではないのでしょうか。現代俳句は子規によって切り開かれた俳句の世界に違いありません。みんな子規の弟子です。子規が安心の境地と信じ込もうとしたものは自己中心の闇であり、安心どころか、人間の苦悩をさらに深くするものだった、子規は仮想の生と死を生きていたと言われます。そうするとぼくたちが俳句の世界に安心の境地を求めるということは、子規が生きた仮想の生と死の、もひとつ仮想の生と死をぼくたちは生きるということになるのではないのでしょうか。そして、これは私は俳句はやらないから、というような問題ではなく、俳句をやる、やらないにかかわりなく、現代を生きるぼくたちに等しく関わりあることだと思えます。子規が安心の境地のつもりで苦悩を深くしていた自己中心の闇、その闇をぼくたちもまた、自己のうちにしっかり見据えなければならぬのではないのでしょうか。

『古事記』というものが日本の歴史を縦に貫いてどれほど大きな意味を持ってきたか、高さんのお話は興味つきません。その大海の一滴だけでもここに取り出すことができたらいいのですが、うまくいきません。それはまたの機会に譲りたいと思います。ただ、この書物のキーワードである、言葉のチエの呪縛に関連して、本居宣長は「古事記」を読み解きながら、言葉のチエというものに呪縛されていったという批判は興奮を覚えました。本居宣長の肉声を聞いたというほど深く宣長に共鳴する小林秀雄もまた、宣長の「古事記」の読み解きを通して、自らコトバの世界の「われ」に閉ざされていった、すなわち言葉のチエに呪縛されてるじゃないかと言うわけです。ただし、この言葉のチエによる呪縛というものは、根源的で、人間が人間である限り免れることができないものであるということが、この本を読むとよくわかります。本居宣長と小林秀雄は言葉のチエに呪縛されているじゃないかと、こちらはそうじゃない側に立って批判するというような筋合いのものではないところがとても深いです。『死にいたって止む「生」のみが人間の生でありませうか。』と、とても強い吸引力をもった言葉に出会います。ぼくたちが、「死」にいたって止む「生」しか生きることができなければ、それは仮想に過ぎない自分を生きるしかない

こととなります。「思えば、私は仮想に過ぎない『じぶん』を生き抜こうとして、その意識もなく『自然の^{じねん}ことわり』に背く生き方をしていたのです。」そこから高さんは親鸞に導かれて、「ジネンニイキル」道を追求されますが、それは同時に日本の歴史を「ジネンニイキル」観点から振り返ることでありました。

ほんとうに味見程度に齧ったに過ぎませんが、『月愛三昧』すばらしい本に出会いました。交流会でも夫人とともに親しく接していただいてあたたかいお人柄から受けた印象は今も薄れることはありません。高さんと呼んでくださったこの集會に敬意を表し、感謝せずにおれません。大和高田に住む凡庸なるひとりの男が、ヒロシマの原爆忌の集會にやってくるなどということは珍しいことです。マスメディアの報道があるのでヒロシマにはみなさんそれなりに関心は持たれますが、その時だけ。それは見事なものです。自分の足で来てみるとそれはもうまるで違います。原爆忌とは何であるか。マスメディアの報道を糧に生きる限り、それはそれでもう、まぎれなく高さん言うところの仮想の現実を生きてるに過ぎないということじゃないかと思えます。ぼくも、かつての全共闘運動の仲間との繋がりがあから、誘ってもらってようやく来れているに過ぎません。

かつて全共闘運動に関わった面々の動きがここ数年各地で活発にみられるようになりました。東京では6/15の安保、大阪は5/3憲法記念日、京都では10/21国際反戦デー、そしてヒロシマ8/6と、いずれも、毎年人々が集まる年中行事となっています。世の中全体から見ればささやかなものに過ぎませんが、今の時代に何らかのこういう表現、行動がなければそれはさびしいことでしょう。ただ、この頃のこのような運動と、かつての全共闘時代の運動と、その精神はどう違うのでしょうか。世の中を変えようとした、革命を求めた、そのために心身を捧げた運動の根本的な弱点は何か。高さんの言葉を借りれば、ぼくはそれは、「他者の喪失」だと思えます。当時、学生運動というのは、大きなうねりを生み出し、多くの学生に多大な影響力をもちましたが、その精神たるや、自分らの運動に同調しないものは間違っているとみなしてかえりみなかったし、それは学生に留まらず、国民の間でも、支持しない人々は間

違ってる、わかってない人でした。人々との深い繋がりがなかったことは明らかです。自分だけが正しい！マルクス・レーニンを読み解いてひたすら革命を求め、自らコトバの世界のわれに閉ざされていったのではなかったのでしょうか。ちょうど、宣長、小林秀雄が「古事記」を読み解いて言葉のチエに呪縛されていったように。子規の安らぎは自分ひとりの安らぎであり、自己中心の闇に覆われていたのと同様に、当時のぼくたちの学生運動の正義とは自分ひとりの正義であり、それはすっぱりと自己中心の闇に覆われていたのではなかったのか。革命に、正義に身を捧げて生きながら、仮想に過ぎぬ「じぶん」を生きていたのではなかったか。連合赤軍事件の痛ましい犠牲とは、「他者の喪失」の集中的な表現でありました。連合赤軍が見た地獄とは自己中心の闇でありました。「自己中心の闇」と言われるとぼくにはただちに思いあたるものがあります。ぼくが何十年と内に抱えている「鬱」がそれです。周期的に陥る鬱は他者喪失の極端な状態で、自己中心は闇を招き、他者との繋がりを完全に欠く状態が地獄そのものであるということがよくわかります。ぼくの鬱とはぼくの内面が経験する連合赤軍事件であり、ぼくが仮想に過ぎないじぶんを生きる限り必ず露出する事件ではないかと思います。ただ、連合赤軍だけが際立って取り上げられますが、連合赤軍だけの過ちではなく、他党派も同じ過ちから免れるものではなかったし、俺は党派ではなかったからといって免れはしません。当時、怒涛のごとく突っ走った学生たちの運動に深い繋がりはなかった。そのことの重みが連合赤軍の犠牲へのしかかったということではないでしょうか。とすれば、党派の責任、指導者の誰彼の責任という問題ではなく、高さんが言われるように、当時の学生運動というものは、言葉のチエに閉ざされていった、仮想に過ぎぬ生と死を生きた、そのことが露になったのが連合赤軍事件だったと言えるのではないのでしょうか。にもかかわらず、ここ数年の間に年中行事として定着した、東京や京都、大阪のかつての全共闘活動家を中心とする運動が昔の運動と根本的にどこが違うのかぼくにはよくわかりません。熱心になればなるほど、またぞろ、言葉のチエに呪縛されていくことになるのではないか。ぼくはどうしてもその心配が頭を去りません。ヒロシマだけが違う気がします。高史明という人を集会の講師に呼ぶということもできるのはヒロシマだけで

しょう。どれだけ触れえたのか。深くて広い、高さんの思想からすればごくごくささやかな学びでしかないことでしょう。それでも大きく影響を受け、動かされました。ヒロシマへきて良かったと心から思います。

大和高田の住人の一人として思うことは、大和高田の人にも、8-6にはヒロシマへ来て、ヒロシマに触れてほしいと思います。そうすれば、高齢者学級へ通って「安心」をほしがる高齢者の姿も違った角度から見ることができるでしょう。逆に8/6には大和高田でヒロシマに連帯する原爆忌を開催したいとも思います。わずか2年連続でヒロシマに来ただけで、ヒロシマはこんなにぼくを揺さぶってくれます。

ヒロシマというときああヒロシマとこたえんとしてぼくの生き方
短歌で遊ぼう(10)

さわ女と寄っといで短歌 題詠～「望」～

<さわ女>

暑中お見舞い申し上げます。

ちょうど上告棄却を受けた7月の末です。あと少ししたら、最後の上告棄却に対する異議申し立てが却下されて、刑が執行されるでしょう。これが自由に書ける当面最後の「短歌で遊ぼう」です。今回は坂口弘さんが作歌についての御教示を送ってくださっています。森本さんがそれを私にも送ってくれました。40ページ近い『六十代からの短歌実作向上作』というタイトルの文、坂口さん自身の経験を整理してまとめて伝えてくれているものです。その中で坂口さんは、もっとも良い手本として、石川啄木をあげ、くりかえし暗記するまでなじみながら記憶復唱して学ぶことから教えています。啄木歌集を征服していくこと、暗記することをすすめておられます。この坂口さんの文は、ちょうど上告棄却でバタバタしているところに今、交付を受けたばかりです。これから読んで学習してみます。まず坂口さんに感謝を伝えてください。

これまで「短歌で遊ぼう」の中で、顔も知らない友人にまで心に触れて、私なりの共感を伝えることができたのは、とても楽しく幸せなことでした。みんなにありがとう！と伝えます。今後は友人たちのお便りに一人一人返

事を書くことはできませんが、限られた、私の発信する手紙の中から「さわさわ」や「短歌で遊ぼう」に取り上げてくださるよう編集長にお願いします。

影法師（岐阜刑）

暑中お見舞い申し上げます。毎日本当に暑い日が続いておりますが、ふうさん初め「さわさわ」の会員みなさまにはお変わりございませんか？岐阜刑務所では8月15日ごろから、10月に行われる運動会の練習が始まり、小さなグラウンドでは、この暑さをものともせず、工場が優勝するためにみんなで頑張っております。私も今から20年くらい前までは足に自信がありましたので、宮城刑務所にいたころなどは、元赤軍派のアオちゃんをライバルに走り回っていたものですが、人間57歳にもなると身体のあちらこちらにガタがきてしまい、昔のような真似はできなくなってしまいましたので、今はおとなしくしております。それでも若い人には負けたくありませんので、運動時間ともなれば身体をコツコツ鍛えておりますので人は私のことをスーパー爺と呼んでいるようです。さて自慢話はこれくらいにして、いつも私のような人間のため温かいメッセージをありがとうございます。特にふうさんの判決が3月に出ていたのであれば、このようなメッセージはいただけなかったもので、とても感謝しております。そして私のつまらない質問にも余すことなくお答えくださりましてありがとうございました。ところで、ふうさんが子供の頃によく遊びに行ったという豪徳寺ですが、私も昭和46年頃に、世田谷の新町1丁目に少しだけ住んだことがありましたので、東京の地図を引っ張り出して、この豪徳寺という地名を探してみましたら、何と、豪徳寺と新町との距離は1,8 kmしかないことがわかりました。当時、国道3号線沿いで桜井さんという人が経営する、三光重機という会社で、日立0,6AWドラクライン（浚渫工用クレーン）のオペレーター見習いでしたが、毎日、千葉の方にある現場に行っておりましたので、豪徳寺に行く機会はありませんでした。しかし、野田といい、豪徳寺といい、不思議な縁を感じてなりません。それから今回「革命の夢の軌道を辿りつつ抗癌剤の点滴五時間」という作品がありま

したが、この抗癌剤の副作用を少しでも和らげる方法はないものかと社会の人間に協力してもらい、探していましたところ、ようやく見つけることができましたのでお報せします。横浜市立大学付属病院の渡部教授が、体内時計治療法というものを考案して、癌治療を行っていますので、少しその治療法について説明させていただきます。人間の身体とは多くの細胞によって形成されていることは、私がここであえて申し上げることはありませんが、その細胞の活動が最も少なくなった時間帯を利用して抗癌剤を投与すれば、副作用が少なく治療を行えることを発表しております。一般的に人間の身体にある細胞の活動が少なくなるのは、夜の10時から翌朝の10時までなので、この時間の間に通常の1,5倍の点滴を行っても臓器に余分な負担をかけることなく、しかも副作用である嘔吐や脱毛などの症状に悩まされることもなく食生活もスムーズに行えるとのこと。ただ、この臨床実験はあくまで肝臓癌患者のデータなので、ふうさんの症状に採用できるかどうかは不明ですが、よろしければ一度病院の方へ相談されてみてははいかがでしょうか。最後は、私は他人に対して優しい心掛けを持っている人間だということですが、決してそのような誉め言葉をいただくほどのことは何にもしておりません。ただ身寄りのない私に対して、このような形でおつき合いをしていただくわけですから、常に感謝という言葉をお忘れず、ふうさんとの出会いを大切にしていこうと思っただけですから、これからもよろしくお願ひします。

- (1) 刈られても十日もすれば花付ける白瓜草は我を励ます
- (2) ガラス越しにアマガエルとの睨めっこ読書もあきた連休なれば
- (3) 雨上がり紫陽花の枝を登り行くのろき力の大蝸牛
- (4) 貝を割るラッコの仕種愛らしくテレビに独り喝采を送る
- (5) 白昼の怒りのごとき雷は虹を残して遠くに去りたり
- (6) 雷雨は俄かに辺りを掻き消して大地を叩いて清めるが如し
- (7) 人生は七転び八起きというけれどコケてばかりじゃ話しにならぬ
- (8) 水芭蕉生いたるところの湧水を掬う吾手に青空一杯
- (9) 少しずつ惚けて来たかこの我もメガネを掛けてメガネを探す

(10) 萩の花の押し花添えて久しき人に文を書きたし夏の夕暮れは
くさわ女>

「アオちゃん」とライバルで、走り回っていたのですか？私もアオちゃんに何十年ぶりに会って、逝った友人を思い涙を禁じえませんでした。アオちゃんは元々、明るい性格の人なので、私も励まされ再会を喜びましたよ。また、世田谷もご存知でしたか。先日は雪野さんという元京浜安保共闘の友人が故郷の世田谷の写真を送ってくれました。面会の時に子供時代の話になり、同じ世田谷だったので、田圃や、菜の花畑の世田谷を語り合いました。その後ついでがあったからと、懐かしい子供時代の玉電上町の風景や街の風景を送っていただきました。とても嬉しいものでしたよ。新町は桜新町のことでしょうか。よく遊びまわったフィールドの一つですけど、知ってる人や地名をわかりあうと何だか昔からの友達だったように嬉しいものですね。これまでも助言ありがとうございます。癌の治療のこと規則第一の東拘ではとても叶わないアイデアです。病棟にいるわけではないので難しいです。でも今のところ、医務の医師たちも積極的に対処してくれていますので、きっと大丈夫です。今後移監になるので、これからの条件はわかりませんが、でも新しい環境を、「好奇心を持てば楽しむ事だってできる」と励ましてくれた、元中核派だったという、「さわさわ」につながる友人Kさんの言葉も聞いています。影法師さんが今の環境の中でお、そんな風に問題提起して下さることに感謝します。そして私も新しい処遇の中で影法師さんのように、一首一首作ろうと心がけていきます。これからもよろしく。

(1) から (4) また (9) も獄の生活を詠んでおられて、何だかとても影法師さんの様子がとくわかります。(5) はとてもきれいでまとまりのある歌ですね。視野も大きくてとてもいいです。(6) もその余韻を感じさせます。(8) もそれらに連なるそんな広さを感じます。(7) は思わず苦笑い。私達はよく「敗北を勝利の土台へ！」とずっと奮闘していましたが、友人の一人が、「もうええわ、土台はいっぱいある」と苦笑いしていたのを思い出しました。そうですね。押し花を添えたい、そんな思いになります

ね。でも獄中ではそんな事一つができない、禁止事項なので、余計その思いが伝わります。

M・M (岐阜刑)

さわ女さん、こんにちは。「短歌で遊ぼう (9)」にて皆さんの瞳目すべき作品の短歌や俳句に触れることの喜びに、そしてさわ女さんの感想を届けてくださいまして、只々感慨無量です。さて年一度、中部より発行されます「わらく」被収容者文芸・美術作品コンクールの応募が本年度もあり、美術の部は3度入選しましたが、文芸の部、短歌・俳句は一度も入選したことはありませんでした。それが、な、なんと本年は短歌、俳句それぞれ、一首、一句入選しました。今後は中部8刑事施設にて審査されることになりました。さわ女さんは前号で、「特性のある歌人に成長し、才能が開花しそう」と誉めてくださいました。入選を予想されたかの如く、またこれまでのアドヴァイス、感想が実りましたことを心より感謝します。では、これまで瞳目すべき作品を披露していただきました「ごめんねジロー」さんの御冥福をお祈りいたします。合掌。

- (1) 望郷を離れし我は学び獄の地に見つけたるプチな教会
- (2) 懲罰や心配くれし担当のわずかな言葉胸に残りぬ
- (3) ひそやかに夏流れゆく片すみにあたまふりつつ生くる虫あり

俳句

- (1) 団扇風隣の煽り盗みけり
- (2) パレットに秋の彩りを絞りけり
- (3) 雨戸閉じ海辺の茶屋の夏終る

<さわ女>

すごい！「さわさわ」仲間の出世頭と呼ぶべきか?!一首、一句が入選、おめでとうございます。誰がどのように審査するのかわかりませんが、(権力批判は採用されないとか?!) 良い歌や句は共感、共振を呼ぶものです。M・Mさんの歌にはそんな可能性が開いたのですね。これからも作り続けて、希望を増やしてください。

- (1) は題詠を視野として詠んでおられるのですね。今の地で生きる気

概を育てているM・Mさんの姿が浮かびます。(2)は新法以降画一的な統制が強化される中、人間味のある当たり前のことができにくくなっている現場です。でもそんな中で良心的な担当の態度には心が和みますね。獄でのつきあいは、人間の本性がよく見えます。「懲罰や心配くれし」は「懲罰に心痛めし」または「心配りし」とした方がわかりやすくいいと思います。(3)も前向きな己をとらえていて、とても全体に意欲的だなと感じます。俳句の(1)はすごくいいです。これはプロみたいですよ！句の切り取り方がとてもうまい！と思いました。俳句は影法師さんの方が私よりよくわかるでしょう。(3)もいいですね、味があります。更に(2)も才能を感じさせます。歌も句も前向きな力にしてください。

Y・M (千葉刑)

さわ女さんのこと新聞で知りました。裁判のやり方が正しいのであれば、とっくの昔に日本から、政、官、財の不正もヤクザも消えています。権力者には効力はない！しかし、裁判官の心証という便利な面で有罪にされた人がたくさんいます。私は2回、人生を狂わす判決を受けこの国の法に失望しました。検察と裁判官に官僚タイプがおり、このメンバーで組まれた裁判は絶対に有罪になり、絶対に被告人有利となることをしません。政治が本当に変わるためには、この法の面が信の正義とならないと無理です。判・検交流、退官後の再就職先と同じルートですから。中には正義の人もいます。しかし少数です。法務省から検察官僚がいなくなってスタートとなるかと思えます。望みは非常に薄いです。検事総長を外部から持ってくれば…。さわ女さん、闘うにも、どんなことをするにも、心と身体が健康でなければいけません。さわ女さんに合ったストレス解消と健康法で乗り切ってください。

(1) 組む文字に人の心が表れる野大希高郷望みのままに

(2) この国は法治国家も自称する胡散臭さもここに極めり

<さわ女>

励ましありがとうございます。本当に!世界の基準「推定無罪」「疑わしきは罰せず」というのと反対の日本。検察が「正義」を独占して、起訴有罪

率が99%以上ですから、独裁国家並ですね。でも、官僚天国ももう限界に来ています。少しずつでも、人権が世界並になることを願っています。フランスにいる友人は終身刑ですが、時々の手紙で処遇の違いに驚きます。彼は葉巻を悠然と喫って、獄中自由に過ごしています。日本もそのうち?!雲泥の差ですね。

(1)は題詠を詠んでくださったのですね。「組む文字」とは何を指しておられるのでしょうか。私の狭い想像力では描ききれませんが。(2)はそうですね、政治時事をそのまま一首に詠むのを私も時々やります。なかなか難しいです。でも、被害を受けた切実な思いとして怒りが伝わります。

左木悠三

(1) 今日もまた遅延証明手渡され人のはかなさ踏みしだく朝

(2) 死ぬなよと叫ぶ衝動おさえつつ明日への望み窓越しに見る

(3) おさなごのひとみに映る食卓は我がみたと対をなすのや

<さわ女>

先日は詩や支援のお便りありがとうございます。今後ともさわさわと共に！(1)は日本の日常生活を離れてしまっていた私には昔の通勤時代の電車の遅れのことしか思い浮かびませんが。そうでしょうか。「人のはかなさ踏みしだく朝」に怒りが込められていて、何があったのだろう?!と知りたいもどかしさを感じます。(2)は私も何度か込みあげた想いでもあります。時代の中で無力な己を凝視しつつ激情をのみこみながら、愛する人へと発する気持ちが浮かびます。抽象的である分、普遍性がありますね。(3)は左木さんの子供時代として大人になって子等とむきあっている食卓でしょうか。そこにまた、左木さんは何を見ているのだろうか知りたくなります。今後もまた、詠んで下さい。

すみ女

(1) 人々の望みたずさへをちこちにいきて火と燃ゆほたる愛しも

(2) 青嵐山あじさいの花揺れて高き梢に鳥も巣ごもる

(3) 季節ごとに現はれいづる虫々を愛でてありけり頭垂れつつ

(4) 夏空に映えて咲きゐる百日紅重ね見るめりふうさんの面影

(5) 忘れまじ今日は八月六日暑き日になほ熱かりきあの日のあるを
くさわ女>

(1) は題詠をきれいな情景で詠んでくださいました。何だか人々のために自分の命を燃やす自己犠牲的な姿を「ほたる愛しも」という結びで哀しく讃えているようにひびきます。愛しいのに殉教のような、哀しみの夏の歌。言葉運びもプロの方なので学ばせてもらってます。(2) もさわやかなすみ女さんの姿を映すような一首。あじさいの花と空と梢と生きものの姿、広く大きな自然に一人立っているようなすがすがしい思いです。私は(1)の「ほたる愛しも」の方が好きですが、この(2)も悠然としたところが好きです。(4)では「さわさわ」の旗の青さに百日紅を重ねます。裁判に通う道の二ヶ所、浅草の街路樹と、日比谷公園に咲くいつも青空に楚々として、鮮やかさで自己主張している百日紅に愛着を感じました。すみ女さんの思いやりを受けとめつつ百日紅を思い出しています。(5)は8月6日をしなやかにそしてまた、強い怒りを「なお熱かりき」で示しながら、ノーマアヒロシマを忘れまじと宣言する我らの世代の志に共感します。今後他の方々の歌の感想も時々書いてください。

だっちゃん

その昔中洲の工場地帯から神崎川を渉る唯一の橋の名前はモスリン橋。市バスも走っており、私が乗るバスのバス停は弥生塚、遊女塚などの名前が付いています。今も尼崎からモスリン橋を渡ると大阪の加島・神崎・十三へいく道。20歳のころは加島の改良住宅団地内にある中華屋でアルバイトしていました。

(1) 真夏日にモスリン(毛ス綸)橋を眺むれば二十歳の頃がよみがえりにけり

(2) あたふたの「まにあうかも」としるされたメールにのぞみ・再会(サイチェン)たくし

(3) 牧野一樹の一周忌に

八月や紅のほお抱え行きし人紅蓮となりし一年が過ぐ

俳句

作業終え 見上げてみれば天高し

くさわ女>

だっちゃんと出会ったのは(1)の二十歳の、その頃でしょうか。だっちゃんの大学に「都落ち」した赤軍派が7・6のあとに押しかけましたね。でもいい大学で、先生が学生と連帯したくてうずうずして、全共闘はうるさがってましたね。山田宗睦氏とか、パークレーから戻って来て、「がんばれ、もっと本気でやれ!」と言ってた山口先生とかね。その赤軍派が来た「大学異変」の前の二十歳の頃でしょうか。まじめで、ひたむきで、ハンサムな青年。赤軍派に少し懐疑的ながら、協力し、いつも「いい気分」になって突っ走る一群と違う地道な行動をしていたのが印象的でした。それで若松さんらが「赤P」映画をつくった時「信頼できる人」として、遠山さんとだっちゃんを推薦しました。それが、あれこれ迷惑をかけたり、大変な激動の日々になったのでしょうか。いつかアラブと日本の活動の時系列をつき合わせて話をしてみたいと思っています。(1)はきっとそんな激動前の労働に精を出していた頃でしょうか。人生は知らず知らず岐路を選びつつ生きて今に到っています。そんなことを捉え返しているだっちゃんが浮かびます。(2)はこの歌を題詠を詠みこんで送ってくださった編集長とのやりとりが浮かびます。再会をと共通の思いで詠んでいます。(3)は「さわさわ」われらの愚蓮は8月8日に一周忌ですね。牧野さんは謙遜で愚蓮を自称していましたが、だっちゃんはそれを受けとめて愛惜の思いを詠んでいます。「紅蓮」となりし一年が過ぐ。でもみんなの中に牧野さんは生きていますね。だっちゃんも、私も。

華灯

(1) 望月の香りが満ちる路地奥に愚図れた椅子に烏瓜咲く

(2) 望月の夢のかげらを拾い来て大きな窓のステンドグラスに

(3) にこやかにくずれる顔が望月に映る気がする風湿る夜は

(4) 望月の夢切子面に乱反射す貧しき闇のこころを照らせ

<さわ女>

いつも節気の歌を季節の自然の移ろいの一瞬の写真と共に送ってくださってありがとうございます。これからはお便りはできませんが今後ともよろしく願います。時々の歌は獄舎でとても楽しみです。今回は題詠を送っていただきました。題詠もまた、自然の詠み方、採り方をまなびます。

(1)の上の句と結びの「烏瓜咲く」が結びあって夏の懐かしい情景を思い出させてくれます。烏瓜の花のはかない美しさ、もう小さな実もつくころなのでしょうか。(2)華灯さんの歌にはいつも凝視させる言葉が対のようにあります。「望月の夢のかけらを拾い来て」とステンドグラスが響きあって、その夢のかけら、光のしずくを眺め見る思いになります。(3)は穏やかな望月の静かな夜、こんな夜なら風湿る夜も悪くないと感じます。

(4)貧しき闇のこころを照らせが強烈に響きます。美しい切子面に乱反射する月光の幻想的な美しさと共に報われない闇へと思いをむける華灯さんの生きる姿勢が何だか伝わってくるようです。一首、一首に感慨がある歌、これからもプロの歌で「さわさわ」をにぎわしてください。なお、こちらからは、お便り出せませんが、また、節気の歌、お待ちしております。受信は少し遅れてもこれまで通り、受け取れるようです。

かおり女

サギソウの季節に貴姉は旅立たん絆のかたち空に残して

俳句

- (1) 目にしみる汗のむこうに夏水仙
- (2) 夏でよかった思い新たに雲の峰
- (3) 夕焼けや友ら西より帰り来ぬ

<さわ女>

かおり女さんにはとても温かい家族のような心で支えていただいて感謝ばかりです。ありがとう！一首の中に歌も熟してもっと詠めそうな気配を感じます。サギソウの庭が浮かびます。夕暮れのサギソウは特にきれいですね。飛び立つように。そんな庭を見つめつつ思い出してくれてありがとう。この一首の転調の結びがこれからのかおり女さんの才能を感じさせま

す。空に残して”という非凡さ！今後も続けてください。私からのお便りはできなくても、青い空を見たらいつも「さわさわ」の旗を思い、かおり女さんや住吉さんら旗手とデモを思い、いつも「さわさわ」みんなと共にあります。これからも共に！それから、俳句を追記していただきましたね。私も追記で応えます。ぎりぎりの面会で共に歌えたこと、嬉しく忘れられません。インターで別れにスクラムもアクリル板通して手を重ねあった「さわさわ4人組」でしたね！きっとこの時の句でしょうか。句も才能がひらめいています。今後はかおり女さん、すみ女さんに「短歌で遊ぼう」も先頭で願います。

原啓介

- (1) 伝わらぬ小さきことも或る日から遠くにありて思うものあり
- (2) ここがそう友が生死の分かれ目に眼を腫らしつつ巡礼の旅
- (3) 用意した拉麺の華黄色く咲けり風に迷いて鳩岩巡る
- (4) 異国にて追悼の意を尽くしたる我ら眺める恋人の丘
- (5) ざらついたレバノン紙幣手に取りてここまで来たか距離に驚く
- (6) 正解はあってなるかとユセフ問い否あるはずだ水平線に
- (7) パーシムとサラハの墓苔生さずユセフの写真白髪悲しき
- (8) 友唄うマイク持つ手に震えあり幾年のこと振り返る吾
- (9) 異邦人革命愛し時空越え己が命を捧げんとする
- (10) 大義とは人をしてかつ人が死すそのようなもの吾要らざりき

<さわ女>

「ベイルート巡礼十首」です。リッダ闘争の戦士たちへの巡礼墓参りを行い、墓前ではパンタさんが「オリオン頌歌」「ライラのバラード」「七月のムスターファ」を歌ってくれたとのこと。この時にリッダ戦士たちの過ごした街ベイルートで詠んだのがこの十首です。

(1)は現在の日本のもどかしさから脱却したベイルートから人生を鳥瞰し、込みあげる思いを歌っているのでしょうか。(2)、(4)、(5)は巡礼の旅、自分だったかもしれない71年の戦友であった若き旅人を思いながらベイルートにいる様が浮かびます。(3)は72年1月25日に寒中水泳

中に水死したオリード山田さんを弔って、彼の好きだったラーメンとぶどうをバーシムや丸岡さんらがピジョンロックのすぐ側から海に投げ入れていたのを思い出します。彼らに倣って拉麺をささげられたのですね。感謝。風に迷って千切れたラーメンの華がピジョンロック（鳩岩）のそばに落下していく様が目にみえるようです。（6）はは友人と対話し葛藤してきた日々が浮かびます。仲間ならちょっとした横暴も脱線も許しあえたし本音を語り合えたはずです。そして必ず困難の中に活路を見出してきたユセフを思いつつ、水平線の向こうにある確信を見つめているのでしょうか。（7）のバーシムとサラハ、ユセフの墓は今も苔生やさずにあるのですね。そして巡礼の友の花束。アラブでは墓石に写真を転写してあります。（転写というか、墓石に写真がそのまま転写してあります。）墓石の若い、1972年のバーシムとサラハの写真と共に、2002年のユセフの写真がならんでいるのでしょうか。それぞれの人生に自分を重ねている詠み手の姿が浮かびあがります。（8）にあるように墓前で連帯の歌を歌うパンタさんの思いはどんなだったでしょう。辺境にある私はあの墓地を思い友情を思い感謝するばかりです。そして、（9）、（10）には時代と時間を越えて殉教した友らを慈しみ想う感慨が溢れています。今もその輝きへの敬愛とともに生きていてほしかったという偽らざる思いが溢れていて辛いです。人が死ぬような大義はいらない、そんな時代を超えた友情がペイルートの海に叫びとなったのでしょうか。青い地中海の海辺、戦士たちが過ごしたパールベックへ、そして墓参りへと巡礼の旅は十首を通して、私に故郷をなぞるような思いを伝えてくれます。ありがとう。

森本忠紀

- (1) 花招く仙台哀し獄窓に二十余年の友を訪ねて
- (2) 飛機より見る眼下の山々雪かぶり列島の背骨の如く連なる
- (3) 過去五回逮捕されたとう委員長の黒く大きな澄みたる瞳
- (4) 物言わぬ者らがものをいう時に新たな貌の世界は生まるる
- (5) 九条を守れと署名に独り立つ八十路嫗に新緑映える
- (6) 笑み湛う貌に包める激しきもの燃やし吾が友希望を紡ぐ

- (7) 希望とういつも心に人民を求める君の歌の主旋律
- (8) 裁判を十年闘い下獄する友を見送る船出のごとく
- (9) 長き年を下獄する君ただ二つ携え行くは希望と絆
- (10) また会う日を固く約して手を振りて友は新たな旅へと立ちぬ俳句

- (1) 国連へ湧く夏平和大行進
- (2) 核いらん国連へ夏攻め上れ
- (3) 国連へ日本反核夏の陣
- (4) 座す席の涼しや国連会議場
- (5) 国連前響け吾が歌若葉風
- (6) 夏燃える世界平和大行進
- (7) 地を覆う平和スクラム風光る
- (8) 芋の苗植える園児の優しき手
- (9) デモ隊に合流嬉し梅雨の雨
- (10) 弾んでる梅雨降る音と三線と

<さわ女>

「さわさわ」編集長の忠紀さん、これまで大変お世話になってばかりでした。ありがとうございます。私の新しい旅は自由を制約されることです。それでも千切れる程、手をさしのべて絆を握りしめて進みます。共にありながら書けない分は忠紀さんが「さわさわ」の仲間たちと共にみんなを主役にしながら、今後とも季刊誌を出し続けてくださることを期待しています。そして社会に復帰した時には、「さわさわ」のみならずスクラムを組んでインターで乾杯したいです。その間、「さわさわ」のみならずと変革の志で絆を育てて行ってください。

忠紀さんの歌は行動力の広さを伝えてくれて、いつも志をそのままストレートに歌うのが小気味よいです。（1）は仙台へ丸岡さんを訪ねた時の連帯と友情の想い、（2）は仙台やアメリカへとはしりまわっていた忠紀さんが空からあらためて日本をみつめている姿ですね。愛すべき日本、（4）に繋がります。（3）は関生の武委員長を詠んだのでしょうか。昔、関生が闘

いを抑圧する日本共産党から苦しみと怒りの訣別をしたのを思い出します。働く仲間を信じ、身体を張って仲間と信義を守ってきた委員長への共感と敬愛の様子を想像します。(5)も街で出会った九条を守ろうとする市井の生活者の強い意志に母親や益永スミ子さんを思いつつうたっているように思います。「新緑映える」が余計に一首をひきたたせていて(5)はとても好きです。(6)、(7)、(8)、(9)、(10)と私を支え、励ましてくれる歌です。どんな時にも連帯と友情の絆がいつも私を強くしてくれます。「刑の確定」は逆に希望と自由へのカウントダウンだと、みんなの応援の歌が聞こえます。短歌がこんなにも共感、共振したり、刺激しあうなんてこの「短歌で遊ぼう」で気づいたことです。本当にありがとうございます。「新しい旅に出ます」という気分です。船出のように見送ってくれてありがとうございます。時々また旅路の港町に会いに来てください。そしていつか寄港して乾杯！句の方は、ニューヨーク、国連へと出かけた経験があふれています。(3)はちょうど訴えたい一句です。アメリカまでが「反核」を言いながら、核独占を企てている中、益々日本が「本当の反核」のイニシアチブをいかに？と問われる夏です。核全廃を訴えると共に、ヒロシマ、ナガサキの被爆者に謝罪と補償をさせるまでアメリカに国民が求め続けたいものです。今回、忠紀さんが経験したように一人でも多く世界を経験しそして人々がそこから交流するのは、とても未来にとっていいことです。日本の国民の財産になります。そんな財産も更に育ちますように。一句一句から、そんな思いが私も湧きます。そんな中(8)は忠紀さんの得意な家族、子供たちをうたった一句。「優しき手」が一句を光らせています。今後とも行動力を歌や句に。そしてまた行動に！健闘を祈ります。

<さわ女の題詠>

- (1) 我が望み獄舎を出でて友のもとスクラム組みでインターナショナル
- (2) パンドラの箱に残りし希望さがしパレスチナへと届けてみたい
- (3) パレスチナ難民キャンプも戦場も人々笑みて希望語りぬ
- (4) 予想通り上告棄却受けてなお友情の絆に希望重ねん
- (5) 敗戦の六十五年と同じ年重ねつ希望の変革を更に

- (6) 希望とは持ち続ける限り叶うという友の言葉をかみしめる夜
- (7) 望むなら何にでもなれると羽ばたいた我らの時代を悔いることなし
- (8) 叶うならリッダ闘争五十年目友と乾杯あの西部講堂で

～さわさわの読者のみなさん、ありがとう！新しい年から、
また、お便りします。これまでの励まし、友情が心に満ちて

います。8月4日刑が確定しました。2022年5月30日頃が満期らしいです。8月4日は希望のベクトルから見れば自由へのカウントダウンです。いつも共に！ありがとう！さわ女 8月5日追記～

—短歌で遊ぼうは続けます。—

さわ女さんは次号から各作者の作品に、これまでのようにコメントを寄せていただくことができなくなりました。受刑者処遇による発信制限のためです。けれども、そこで、この短歌コーナーが終るわけではありません。今までと同様作品を寄せていただきたいと思います。こちらからの便りの受信は原則としてできますので、さわ女さんに読んでいただくことはできます。「さわさわ」へ作品を発表することは何よりもさわ女さんへの励ましになると思います。そして発信制限というような人権を無視した権力の歪んだあり方、現在の日本の監獄制度の問題点を世に明らかにして、受刑者の人権を取り戻しましょう。作品を作り続けることはそのための闘いであると考えます。

次号12号の題詠はく出会い・別れ>といたします。

さわさわ

【さわ】…「共に」「一緒に」を意味するアラビア語です。「さわ」一語でその意味がありますが、「さわさわ」と続けて言う言い方もよくされるそうです。語感がいいので、会報タイトルには「さわさわ」をいただいております。

【編集後記】今号は重信さんが未決処遇の状態編集できた最後の号となりました。受刑者処遇となって発信枠が制限されたら、重信さんの連載はどうなるのと、心配してくださる方も大勢おられることと思います。あの連載が楽しみなのに続くのかな…。心配いりません。用意のいい重信さんのこと、むこう1年間は十分まかなえる量の原稿をすでに書き溜めてもらってあります。それ以降どうするかはその1年の間に考えると言っています。今号はまた重信さんの新しい旅立ちを見送り、連帯する号ともなりました。これからの「さわさわ」は、重信さんを支援し、励ましていくうえで役割一層重大です。具体的には「短歌で遊ぼう」をより充実、発展させていきましょう。各作品に対するコメントはこれまで重信さんが一手にやってきましたが、次号からはみんなで分担してやっていきます。獄中からのレギュラーメンバーである、影法師さん、M・Mさん、Y・Mさんの作品には波女さんがコメントを寄せてくださることになっていますので、どうか、これまで通り奮って投稿お願いいたします。平良さん、哲蕉さん期待しています。／表紙は平沢貞通さんの絵です。平沢貞通さんの絵は前号裏表紙に登場していただきました。「十八歳自画像想出描」これからも度々お目にかかりたいものです。平沢武彦さんよろしくお祈りします。／米澤鐵志さんは被爆証言活動、核廃絶運動でお忙しい中、前号に続いて「私の二十歳代」の寄稿ありがとうございます。果敢なる闘争に賭けた人生の歩み、ますます聞かせていただきたいくなります。／今年の8・6ヒロシマは高史明さんのお話を聞いて大きな感銘を受けました。ただ、ぼくの筆が遅くて、報告記を書くだけで、「さわさわ」発行が予定より半月も遅れてしまいました。お詫びします。楽しみに待ってくださってる方々、ごめんなさい。／11月20日(土)2:00～京都洛陽教会(上京区寺町丸太町上がる)にて「重信房子さんの新たな旅立ちに連帯する集い」を計画しています。朗読劇「ハイファに戻って」初上演したいと張り切っています。／次号13号は12月発行を予定しています。投稿等11月中にお願いします。

【さわさわ 12号】2010年9月27日刊



価格は1冊3000円です。

なるべく年間購読をお願いします。

送料込みで年会費は2000円です。

(郵便振替口座 00920-2169764 さわさわの会)

〒635-0061 大和高田市磯野東町3-27 森本忠紀

Tel/Fax 0745-22-4002

mail: toppinsyan@kpa.biglobe.ne.jp